



【プロパンガス】

プロパンガス(LP ガス)は、全国の約4割に相当する2,200万世帯が利用する国民生活に欠かせないエネルギーになっています。LP ガスは、皆様のご家庭に設置しているボンベにガスを充てんして、家庭の熱源(給湯器、ガスコンロなど)に使われているほか、飲食店や福祉施設もLP ガスを使用しています。

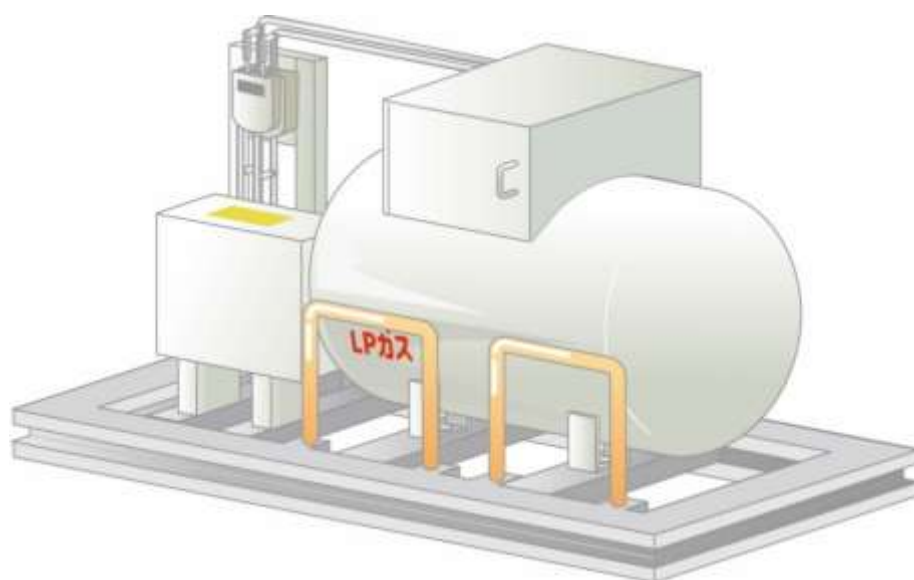
LP ガスの一つの特長として、災害に強いという特長があります。

LP ガスはなぜ、災害に強いエネルギーといわれるのでしょうか。

大きな理由としては、「自立稼働が可能な分散型エネルギー」ということです。

LP ガスはボンベ容器に充てんして必要とする場所に設置できる「分散型」で、電力などを介さずに、独立して稼働します。このため、災害で電力供給がとだえたときでも、力を発揮できます。自家発電機用の燃料となる重油や軽油も、「自立稼働が可能な分散型エネルギー」に位置づけられますが、重油は3カ月、軽油は半年で劣化が始まるため、残念ながら長期保存には向きません。この点、LP ガスには品質劣化や機材を腐食させてしまうなどのリスクもなく、長期保存が可能です。

皆様のご家庭には、基本的に2本のガスボンベを設置しています。理由としては、ガス切れを起こさないように予備のボンベを設置しておりますが、実は災害への備えにもなっています。使用中の1本に加え、常に満タンのボンベが予備として設置しています。1本予備があるということで、災害が起きても1カ月程度生活できるだけのガスが備蓄されていることになります。さらに、復旧が早いのもLPガスの特長です。被災しても、LPガスの場合は1戸単位での点検・修理で済み、ボンベから使用する場所までの配管も短いため、迅速に復旧できるのです。



こうしたLPガスの災害への強さは、東日本大震災でも証明されました。災害では、特に被災から3日間（72時間）をいかに乗り切ることが重要とされます。実際、自衛隊などが援助に入るまでに、各地の避難所でLPガスを活用した暖房・炊き出しなどがおこなわれ、命をつなぐ役割を果たしたと報告されています。また、設置が容易なことから、被災者のために建設された仮設住宅でも、発電、冷暖房、調理、給湯の主要エネルギーとして用いられました。

その強靭性が見直されたLPガスは、さらなるレジリエンス強化に向けて、自衛的な「備蓄燃料」としてのLPガスの利活用が推進されています。

その一例が「LPガス災害バルク等導入事業」です。この事業は、ライフライン機能の維持が求められる医療施設や福祉施設、避難所となり得る学校、公民館、商業施設などを対象に、「LPガス災害バルク貯槽」やLPガス発電機などの設備導入にかかる経費の一部を補助するものです。「LPガス災害バルク貯槽」とは、LPガスを貯蔵できる、耐震性や安全性にもすぐれた巨大タンクのことです。

施設の規模などに応じて導入されるタンクの容量は1トンや3トンなどさまざまですが、たとえば1トンのLPガスで、「発電機1台+ガスストーブ5台+70人分の朝昼晩の炊飯+ガスコンロ2台+1日3時間のシャワー」を12日間まかなうことができます。ガスをエネルギー源とする「ガスヒートポンプエアコン（GHP）」を使用すれば、冷暖房の供給も可能です。もし、地震や台風、豪雨などで電力や都市ガス供給網がとだえても、ライフラインを確保できるようになります。

昨今、日本国内では地震や豪雨等の災害が頻発しており、災害対策の重要性が再認識されております。特にエネルギーについては、生活を維持していくために不可欠であり、災害発生時でも安定的に使用できるエネルギーを確保する事が必要となります。今後もアストモスリテイリングは、LPガスを平時・有事共に安心して使用できるエネルギーとして、皆様にご提供していきますので、よろしくお願いたします。